

善ない、成程亭主に死なれてお勝は困るだらうが、夫は自業自得で、何うも仕方がない、又小平次も他に女の無やうに、アンナ者を好んで女房に爲るにも及ぶまいとマア俺は思ふ、けれども是は合縁奇縁で、他人の團十郎が彼是云つた所で仕方がないから、夫婦になるのは勝手だが、其代り小平次の出る芝居にはドンナ事が有つても俺は出られない、慥ふ云ふと弱者を苛責るやうに聞えもしやうが、決して然ではない、何うかお前さん二人が歸つたらば小平次に此の事を話して下さい、殊にアノおかつは只の女ではないから、今に後悔をする事が出来るかもしれない、と俺が云つたとさう云つて下さい、大きにお二人とも御苦勞でした。」

と是から酒肴を出して、坊主小平に二朱判の吉兵衛に御馳走を致しまして歸しました、二人は小平次に會つて團十郎の話をすると、何うせ杉山半六の寡婦を女房にする位なる小平次は好人物で御座いますから、團十郎の云ふ事を悪く聞きませんでしたと見へ

て、

小「團十郎と云ふ奴も日本一の役者に似合ぬ、膽魂の小さな奴だ、成程杉山半六が先代の團十郎を殺したのは悪いだらうが、其の女房に何んの罪がある、夫を俺が今度女房にすると云ふに就て、俺と一緒に稼業が出来ねえと云ふのなら俺も命のあらん限り、團十郎と稼業はしねえ、江戸に居ればこそ市川の親方、團十郎様と尊むが田舎へ出れば五三六、役者に區別はねえ、よし江戸の土地を俺が賣て、是から暢氣に田舎廻りとならふ、何に江戸ばかり日の照る處でもあるめえ、大層小平次は怒て、朋友の止るのも肯ず、おかつを連れて江戸を立ち、第一番に宇都宮に乗り込みました、江戸では中通りの小平次も田舎へ出れば立派の座頭、川柳の悪口に、

「江戸の馬、田舎へ出ると人になり。」

と云ふ事が御座います、處が何うも小平次の芝居が入らない、斯うなると金方から

苦情が出る、興行主は小平次一座に味い物を食せないと言ふ、流石の小平次も困つてしまひ、仙臺で一と興行して、幾何か纏つた金を握らふと、一座を率て乗り込みましたのが、同年の六月、何によらず藝人は六月から八月までは夏霜枯と申しまして、誠にお客様の御出の少い月で、夫故小平次の芝居も思ふやうに客足がつかないさア斯うなると困つたのは、自分の手打で御座いますから、ドロンと一番を入れ、ば何うしても十兩と廿兩と小平次の懐中から出さなければならぬ、左うなると小平次について居る役者は、一人二人と毎日のやうに逃出して、芝居が興行なくなつた、其の上旅籠屋には借金が出来るし、何うする事も出来ません、おかつと二人で此の末何んとしたものだらふ、と相談をした。

かつ『小平次さん、何うも仕方がないから妾が茶屋女にでもなるとか、藝者にでもなるとかして、幾何かお金を拵へやうから、夫で一時借金を追拂つたら何うだらふ』

小『左うよなア、他に工風はねえから一時左うしてもらふかな。』

と話の處へ入つて來たのが、土地の長脇差練名狼の多九郎。

多『何うしたえ大層陰氣じやアねえか。』

小『是は親分さんお出なさいまし。』

多『何を相談して居るんだ。』

小『何に親分の御耳に入れたくない事。』

多『小平次さん、お前芝居が不入で、借金の爲に女房を藝妓にするとか茶屋女にするとか、今話しをして上たやうだが、そんな事をした處で大した金が取れるんではなし、誠につまらねえ考へだらうと俺は思ふんだ、全体幾何あれば宜ひんだえ。』

小『何うも大變な處を聞れました、何に大層な金じやアねえので、廿兩もあつたら一時何うかなるだらふと思ひます。』

多「甘雨で宜いのか、じやア俺が甘雨貸さうじやアねえか。」

小「親分さん貸て下さいますか。」

多「直ぐ今茲に持て居るから貸てやらふ、俺を此の土地で親分だとか貸元だとか云はれて居るんだ、其俺が最負にした役者が、僅な金で女房を茶屋女や藝妓にしたのを黙つて見て居たと云はれると、俺の恥にもなることだ、第一お前も立派な江戸役者じやアねえか、女房を質に入れるのは廢たら宜らふ、さア此の金を遣ひねえ、夫へ二十兩出して貸てくれました、小平次夫婦は地獄で佛。」

小「親分さん此の御恩は死んでも忘れません、おかつお前も能く御禮を申してな。」
わが「親分さん有難ふ御座いました。」

團「左う丁寧に禮を云はれちやア却て困る、處で小平次さん一時俺が雨出して、お前丈を助けたにしろ、是から先稼業が出来ねえ様じやア、何んにもならねえ、何

うだえ厭でもあらふが、當分在へ興行に往たらよからふ、其内に冷風が吹てこやうから、左うしたら此の土地でやんく一旗揚げるが宜い、何うせ在にゆけば田舎役者が相手で、藝は遣りにくいだらふが、郷に入ては郷に従へとやら、當分我慢をしたら宜らふ。」

小「何から何まで有難ふ御座います、夫れでは左う云ふ事に致しませう。」

多「就ては旅籠屋に二人泊て居ては入費もかゝるから、まア當分俺の處に来て居たら宜らふ、男島で女の手が無えから、おかつさんが一人居てくれると俺の方も調法だ。」

小「夫ではお宅に御厄介になる事に致しませう、おかつお前親分さんの云ふ事を聞たかえ。」

かつ「ハイ、旅籠屋に居ると入費がかゝるから、御世話序でに親分さんの處で御厄介

になりませう、小平次夫婦並に多九郎と三人相談の上二十兩の金で義理の悪い借金を返し、小平次におかつは多九郎の處へ食客となる、其内に盆で御座います、在に村芝居があるから、そこへ振りつけ方々座頭で小平次が参りまして、此處が五日先方が六日と諸方を興行する、おかつは多九郎の處に厄介になつて居りましたが、根が淫婦で御座いますから、多九郎と通じた、斯うなると小平次が邪魔になる、何か御金を儲けて歸て来てくれなければ宜い、御金が儲からなかつたら夫れから夫れと歩行て居るだらふ、何うか途中で怪我でもして死んでくれれば宜い、と甚い奴があるものだ、小平次はそんな事は夢にも知りません、八月の初旬に在から歸つて参りました。

小「おかつ、喜んでくれ十兩貯蓄て来た、親分さんに借た二十兩の内へ此の十兩を入れてえのだが、モ一少し借金の方は待て頂いて、茲に永く厄介になつて居るのも

氣の毒でもあるし、又俺達二人も食客となると萬事に氣がおけて叶ねえから、家を持としやう、そこでモ一一度在を廻つて、幾何か金を貯へて、親分さんの借金を返し、久しぶりで江戸へ歸るとしやう、夫婦相談の上多九郎に此の事を話して、近所に家を借て夫へ二人が住居ました、處でモ一一遍在を廻らふと思ふと、世の中は思ひ通りにはゆかぬもの、今年は作物も充分の實がないので、何處からも迎ひに來ない、そこで小平次が退屈凌ぎに綱を持ては、仙臺の在に御座います、淺香沼へ漁に出懸けます、おかつは小平次が居なくなつたら、多九郎を引入れて樂まふと待て居た甲斐もなく、在へ小平次が参りませんので目的がガラリと違つた、或日小平次の不在に多九郎の來たを幸ひ、

かつ「親分、後生だから小平次を殺しておくれな、彼奴が家にこびり付て居ては思ふやうにお前に會事も出來ないから。」

多『馬鹿を云へ、云はゞ汝と俺に罪があつて、小平次には微塵も罪はねえ、如何に俺が長脇差で今まで亂暴で世の中を渡つたものとは云へ、小平次を殺す事は出来ねえ。』

かつ『殺す事が出来ないと言つて、此の儘にして置ては何時お前の姉御になれるか判らない、後生だから殺しておくれよ。』

多『殺せと云ふなら殺さねえ事もねえが、鈍な真似をして、俺と汝が召捕でもした節には取りかへしがつかねえ。』

かつ『だからさ、斯う云ふ風にしたら宜いだらふと思ふんだがね。』

多『何うするんだ。』
かつ『彼奴が毎日沼へ網を打にゆくから、お前が先廻りをして、斯う云ふ風に……多九郎さん。』

多 成程、流石は役者の女房だけ狂言の筋は滅法上手だ、じやアつて舞臺の殺しを實地に見せるかな。

かつ『親分味くお遣りよ。』

多『合點だ。』
姦夫姦婦が小平次を殺す相談、かくとは知らず翌日になると、日の暮合から支度を致しました小平次、夜網を打に出懸けやうとする時、おかつが、

かつ『小平次さん今夜一緒に連れて往ておくれな。』

小『一緒に往くのは宜いが、夜露にあたつて子宮病でも起されては俺が困る。』

かつ『大丈夫だよ、一緒に連れて往ておくれ。』

小『行きたければゆきねえ。』

そこで家を嚴重に締りをして、二人連で淺香沼へ出懸けました、御承知の通り月夜

は魚が寄りません、暗夜でなければ澤山には魚が取れません、小平次がおかつと話ながら、網を擔ひで浅香沼近くへ参りますと、先へ一人網を擔ひで松火を點しスタく往くものがある、之を早くも見たおかつが、

かつ「鳥渡其處へ御出なさるのは親分じやア御座いませんか。」

多「ヨ——誰かと思つたら、おかつさんに小平次さんか。」

云はれて小平次、

小「親分さん矢張り網に御出懸けですか。」

多「沼に大層今年は鯉が居ると云ふから、久しぶりで網を打ちに来た、お前が来たのが幸ひ二人で交代くりに打て見やう。」

小「左う致しませう、おかつ親分さんが御出爲すつたんで話相手が出来て結構だ。」

多「時に小平次さん、舟はあるかえ。」

小「いえ、何時でも岸でばかり打て居りますから舟は御座いません。」

多「俺が一艘晝間から舟の用意をして置たから、夫へ乗て打て見やう。」

小「夫は結構で御座います、デワ親分さん早く参りませう。」

浅香沼へ参ると成程一艘小舟が岸に繋いて御座います。

多「サアおかつさんお前へ乗ねえ。」

かつ「何んだか親分恐ひね。」

多「夫れでは小平次さん、お前先に乗ておかつさんを入れて遣ん子エ。」

小「では親分御免なさいまし。」

小平次が舟に乗り、おかつの手を取て助け入れる、後から多九郎が乗込み、舳を解て櫂を取てグ——と漕ぎ出した、浅香沼は大きな沼では御座いませんが、中央は中々深い、時しも八月の下旬、雨模様で御座いまして、フ——と云ふ冷やかな風、何

んとなく物凄いの。

多『小平次さん、俺が楫子になるからお前一ツ打て見ねえ。』

小『宜ふ御座います、夫れでは親分楫をお願ひ申します。』

と云ひながら小平次、舷頭に出ましてバラ／＼と網を整く中々素人にしては好な道とて上手で御座います、左りの腕に網をかけ右の手を中へさし込み、ギ／＼と舟を廻した途端に、バツと投げた、バラ／＼と網が廣がつた、此時多九郎小平次の足を掬ひましたから堪りません、筋斗を切てドボンと陥る、ガブ／＼と浮上つた小平次、小椽へ手をかけ、舟へ上らうと致しました時、突然櫂を取た多九郎が、小平次の頭上をポキンと打ちました、額が割て目は飛出し、ウ／＼と云ひながら、再び上らふとするを、櫂をすてた多九郎、腰刀を引抜き左りの肩口へ切付けました、此時に小平次がアツと云ひつゝ、確り刀を握りました、グ／＼と多九郎が引たから、バラ

／＼と指が切れる、ノク／＼泡を立て小平次が浅香沼に沈みました。

多『滅法界骨を折せやアがつた。』

かつ『宜ひ梅排だね——、サア親分早く歸らふじやアないか。』

多『左うしやう。』

刀を拭つて鞘に納め、手を洗つて此の舟を岸へ引返し、二人は打揃つて歸つて参りました小平次の住居。

多『大層嚴重に締をしたじやアねえか。』

かつ『此頃物騒だと云ふ事だから、締を嚴重にしたのサ、茲に鍵があるよ。』

多『俺が開けてやらふ、錠をピンと開けて戸をガラ／＼と開き、中へ二人が入ると奥に燈火が點て、咳拂ひが聞へる。

多『おかつ誰か居るのか。』

かつ『可怪しい子、不思議だ子——、何うしたんだらふ。』

多『驚くにやア及ばね子、上つて見ろ。』

二人が座敷へ入ると佛壇の前へ坐つて居たのが小平次だ、流石の悪黨多九郎におかつの二人が、總身水を浴たやう、ゾツと致しました、此時に多九郎長脇差の柄に手をかけ、

多『汝は小平次か、引抜んと致した時バツト飛付た小平次が、多九郎の胸元に喰付きました、ウ——ンと夫へ倒れる、驚ひたおかつがアレと一聲揚げて、表の方へ駆け出さんとするを、宙を飛び來つた小平次、おかつの襟元へムツと喰ひついた、一ふり振りしましたから、血汐に染つて夫へ倒れる、近所の者は斯んな騒動があるとは知りません、翌日小平次の表が開て居りますから、何時の通りと思ひ、中に入つて』
○『小平次さん居るかエ。』

とヒヨイと見ると驚いた、多九郎は胸元に穴があいて、邊り一面血だらけ、向ふを見るとおかつは同じく首が半分取れて死んで居る、實に其の慘状目もあてられぬ、早くも此の事を町奉行に訟へましたから、検視が下りて段々取調べると、小平次の死骸が浅香沼より上つたと云ふ、殊に近所の者の話では多九郎とおかつと疾より姦通致して居つたと云ふ、全く小平次の悪念祟て茲に至りしものならん、と二人の死骸は取すてになり、小平次の死骸は浅香沼の傍にありました自照院に葬りました打は響くで此の事が江戸に知れると、團十郎が馬鹿な奴は小平次だ、あんな女を女房にしたから、知らぬ他國で他人手にかゝつて、横死を遂げるやうな事になつた、是につけても女は恐ひ、と俳優中で正直者と云はれる市川團十郎、小平次の横死を氣の毒に思ひました、翌年二月の十一日、父團十郎の生月忌日、夜分の事で御座いまして、堺町の自宅、奥の佛間で團十郎の位牌に燈明をさしげ香を薫らし、ボク

木魚を叩き、

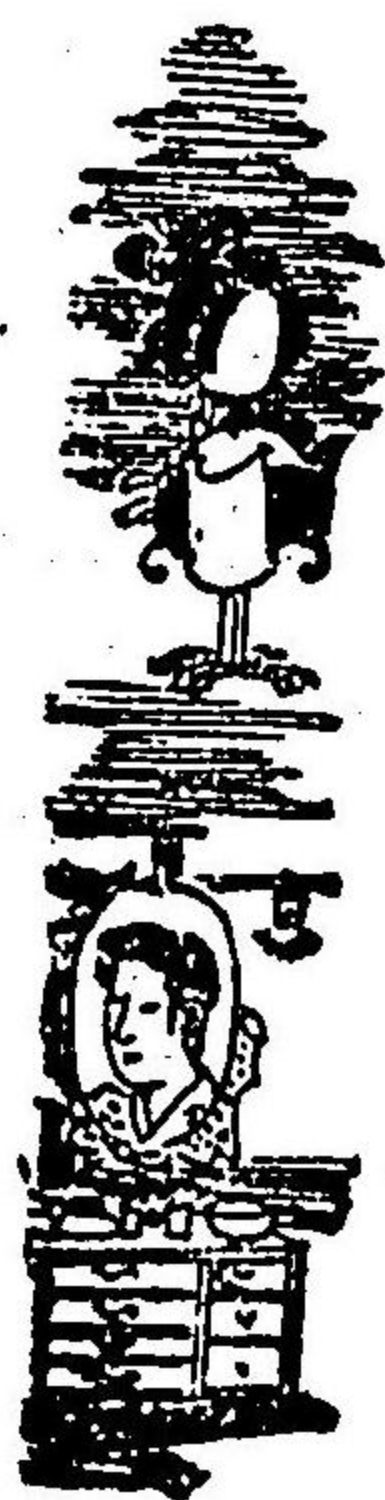
『南無阿彌陀佛』

念佛を唱へて居ると、後にあつてボク、木魚の音がする、ハテナと願願ますと頭が中央に割れ目玉が飛出し、左りの肩より血を浴た小平次が坐つて居る、大概な者なら驚くべきだが、日本隨市川の團十郎、

『貴様は小平次じゃアねえか、何んの恨みがあつて俺の處へ來た、先年貴様が杉山半六の後家のおかつを女房にする時、坊主小平、二朱判の吉兵衛にくれ、俺が云て聞いた事を貴様も定めし聞たらふ、ヤイ小平次貴様位え判らねえ奴はねえ、俺の親父を殺した半六の寡婦を女房にして、此の團十郎にたてをつき、田舎廻りとなり、剩へ名も知れねえ長脇差の爲に淺香沼で殺されたのは、云は、汝の自業自得大方俺があんな事を云はなければ、江戸に居られてこんな非業な死にやうもしめえ』

と思ふ處から、俺の處へ來たのだらふが、夫れは汝の了見違へた、あのおかつを女房にする時俺が何んと云つた、あんな女を持つと今に後悔をする事があると云つたらふ、馬鹿奴郎、早く成佛をしろ、俺が貴様のうかばれる様にしてやるから、ヤイ小平次判つたか、其凄ひ容子が汝も舞臺で出來たらば、立派な役者になられたらふに、死んで出たのでは、幾何汝が上手にしても、ヤン、とは云はれねえ、早く佛になれ、俺の處へ出るのは筋違ひだ、此の團十郎を誰だと思ふ、ツがもねえ。』と暫くもどきで腮の下へ拳をあて、ウンと白眼と小平次の姿がパツと消えました其後團十郎が彼の追善を營みましたので小平次は成佛爲したと見へ更に姿を見せません、儲此の二代目團十郎は寶曆八年九月七十一を一期と致しまして此の世を去りました、俳名を柏菴と申しましたので、人呼で之を菴柏菴と云ふ、夫は七代目團十郎を白菴と書てハクエンと讀せましたので、夫を區別する爲め、菴柏菴と云ふ、市川

家は二代目に五代目九代目、此の三代が名優中の名優であつたさうで御座います。先づ小平次のお話は是にて止め置きまして次を辨じます。



怪談時鳥殺し

是は久しい以前に先代菊五郎が百合の方で、今の芝翫が時鳥、故人松之助が撫子姫、故家橋が浅間巴之丞を致しまして明治座が棧敷が落たと云ふ大入で御座いました、是は柳亭種彦の作で浅間ヶ嶽恨みの西影と題し、有名な小説で御座います、實説で申上げますと、徳川九代將軍家重公御治世、美濃國八幡に於て三萬五千石、金森式部少輔政時と云へる御方の代に御座いました御話で、夫を種彦が取て徳川時代の事には書ませんから、足利時代にして、著作致しました、御話は成るべく御早く申上げますが、寶曆の二年五月の末、江戸芝沙橋の上屋敷を發足致しました、金森式部少輔數名の御供を召連れまして、御國表へ引取らんと泊りを重ね來たのが、木曾妻籠の宿、本陣へ御休息を遊ばして、妻籠の峠へ御かゝりになる、スルと向ふの方

にあたつて何やら人の争ひをするやう、何事かと太田平と云ふ金森の家來が掛付重
けて見ると、十四五になる少女の順禮が、四五人の雲助を相手に必死に闘つて居
ます、何うも此の順禮の強い事、二三人の雲助を夫へ叩き付けた、太田重平之を見
まして、豪い奴があると感心をして居りまして、外の雲助は敵はぬと思ひましたか
ぞん／＼時を逃げて往く、重平は其順禮に向ひまして、

「馬イヤ何うも驚き入つた大層な力量だ、お前は何處から何處へ参るのだ。」

「女ハイ妾は江戸の者で御座いまして、美濃の八幡金森様の御家來、今井定之進と
申す者を尋ねて参ります。」

「馬金森の家來今井……夫は宜い處でお前に會た、拙者は金森の家來太田重平と申
し、殿此度御國表へ御出遊ばすに付、江戸表より御供を致して是へ通りかゝりしも
の、年齒もゆかぬ身をもつて、美濃八幡まで尋ねて参るは定めし仔細のある事であ

らふ、何うせ吾は八幡へ参るもの故同行致したが宜い。」

云はれて此の女子は大層喜びました、然し大名の供へ順禮は入れられません故、跡
から離れて就て参るやう申聞ける、妻籠を下りまして、其晩の泊りが落合宿太守は
御本陣へ御泊りで御座います、夜分に太田重平を御召になりまして、

「馬重平妻籠の山中に於て力勝たれる婦人の順禮に會た由であるが、左様か。」

「馬御意に御座います、出生は大阪にて幼年の頃兩親に別れ、江戸麻布谷町の伯母
の元に養育をされまして、本年十五才に相成ります時と申し、伯母に死別しました
に就て、御家來今井定之進を尋ねて八幡まで参ります由、今井とは親戚だと申し居
ります、道中の貯へも薄ふ御座います故、順禮に相成て妻籠まで参りました處、
無頼漢に出會ひ頗る難儀致しましたが、生れついで的大力、兩三人夫へ投げ倒しま
して御座います、玉の如き美しき容貌に不似合な巴板額にも勝る勇婦に御座います。」

『左様か、夫は又珍らしき女子である、予が家臣今井定之進身寄の者であらふ、宜しく介抱致し取せろ。』

『委細承知致しました。』

そこで太田重平が此のお時の世話を致しまして日ならず八幡へ到着致しました、お時は今井定之進の元へ参り、殿様並に太田重平の世話を受けた事を物語りました、此の今井はお時の爲には母方の伯父で御座います、大層定之進が喜びまして、是からお時を宅に於て介抱致しましたが、然るに間もなく殿様より侍女と致して時を差出せと云ふ御沙汰、今井は有難く心得、當人にも申聞けて御奉公に出しました、名を時鳥と下すつた、と云ふは妻籠の山中へ殿様の御駕がかつた時に、時鳥の聲を聞かれたと云ふので、紀念の爲め時鳥と名を下された、如何にも美人で殊に大坂で親共は商人でこそあれ、不自由なく生活た者の娘として如何にも氣高い處が御座います

夫に男子も及ばぬ大力、殿は時鳥くと御寵愛なさる内にお手をつけまして遂に側妾に致しました、然るに翌年江戸参勤で八幡を御出立になり、御氣に入りの時鳥は殿より先に心きたる家來共に送らせ、江戸芝見橋の御上屋敷へ入れて置きました、たが間もなく殿も御着になる、相變らず時鳥くと御寵愛になりましたが、茲に騒動の出来たのが、金森式部少輔殿の御内室は松平和泉守の御娘御、お夏と申上げました、其時分和泉守は御老中筆頭、大層な勢ひ、金森は外様大名で兎角政府には繼子扱ひにされる、夫故和泉守と婿舅の縁を結び、何か事あつたら此の縁をもつて、家の杖にしやうと云ふ家老どもの考へ、殿様より十才も上のお夏を御内室に致したと云ふ、所が此奥方が頗る嫉妬深く殿様の御目に止る女が居ては自分の不利益と思ひ、不容貌な女ばかり撰んで置きますので殿様が奥方の元へ参りますと宛然百鬼夜行の繪巻物を見が如く醜い女ばかり並んで居る、是が爲に彌々殿様は時鳥の方へば

かり御出になるので、奥方の嫉妬は日々に募るばかり、胸の烟火の消やらず、ブラ
 病ひ出して麻布古川なる下邸に出養生の爲に近頃は御在になる、殿様が病氣見
 舞として見えられましたる時奥方が、

『奥来る十五夜は月見の宴を開きまして妾の病氣を慰め氣保養もいたしたしと存じ
 まする故、あの時鳥も當夜は此邸へ見えまするやう御沙汰を願ひとう存じます。』
 『殿左様か、然らば彼に其儀を申し傳へるであらう。』

と殿様は翌日御上邸へ歸りますと、其夜時鳥へ奥方の口上を傳へまする、迷惑なる
 事とは思ひましたが無據く、

時『有難き仰せに御座います、と御受をいたし、其日になると、夕景より沙見橋の上
 邸を立出た、時鳥は麻布古川なる御下邸へ参りました、女中どもは丁寧に取り扱ひ、
 廳で庭に面したる美しき御廣間へ通される、廊下に掛たる翠簾を高く捲上げたる、

月を見爲、床には土佐光信の筆になりたる極彩色の輻を掲げ座敷には處狭まで酒
 肴を出し、牡丹花を繪きたる蠟燭に火を點じ其美き事目さむるばかり正面に蒔繪
 の脇息に打もたれたる三十二三になる氣高き婦人は是ぞ奥方お夏で御座います、自
 から立て時鳥の手を取り己の座の傍にありし褥へ坐せて、

奥『今日は宜ふ見えられました、疾にも其方に會たく思ひ居りましたが、折もなく
 互に今迄面をも知らず過つる本意なさよ今日よりは妾を姉と思ひくれますやう、亦
 妾も其方を妹と思ひ、憂も樂きも俱に爲さんと云はれて時鳥は、

時『冥伽にあまりし仰せ、有難く御禮申し上げまする。』

と最はづかしげに答へまする、是から女中どもへ命じて時鳥へ酒を勧める、四方八
 方の物語りの内、はや眞夜中と思はれる、月は南にめぐりて泉水へ映じ、庭の老松
 の影は此の坐敷へ落す、實に美事なる風景に人々彌々興に入りて時鳥もすゝめられ

るまゝに思はず盃の敷を重ねました、時に奥方お夏は侍女に命じ松風と銘ある一面の琴を取寄、夫を時鳥の前に押やり、

『其方は顔容の美しきのみならず、心もやさしきちのとか聞きました、定めし琴も上手であらう、何にても一曲調べて、今宵の興を添まするやう。』
と云はれて時鳥は驚きました。

時『是は亦思ひ寄ざる仰せ、町家に人となりましたる私、何うして琴を弾事を存じませう、此儀は平に御免し下さりませ。』
云へばお夏は打笑ひ、

奥『能鳥を捉る鷹は爪を隠すとやら、知らぬと云ふ程尙床敷思はれまするぞ、早ふ調べて聞かせますやう。』
と勧められて時鳥は彌々羞入、

時『只今も申しましたる如く、町家に人となりましたる賤き私、何で琴などを弾事が出来ませう。』
と再度辭すを聞たる奥方は、

奥『是は又思ひもよらぬ其言葉、唐土の伯牙とやらは鐘子期死して後聞人なしとて日頃奏で樂みし琴の糸を断しとか、妾が琴彈事の拙なれば、譬へ妙手を現はしたりとも、其妙なる彈奏を聞取事のなるまじと誨りて彈奏ぬか侍女の中には少しは琴を彈者もありますれば其方の妙手を聞取事も出来ませう、大名の側室たる其方が、琴掻鳴す事や歌の一首も讀ぬ事もあるまじ。』

と真綿に針を包みたる品のい、嫉妬で、チロリツと責付られる、スルト其坐に居りました奥方附の紅梅だの菖蒲だとか隼だとか敷島だとか云ふ水雷艇の名のやうな女どもが、

女「時鳥の方は御歌は御上手で御座いますよ。」

奥「儲は和歌の素養があるとか、幸ひ今宵の月を題として一首詠しますやう。」

女「あの奥様へ申し上げます、時鳥の方は三十一文字の歌では御座いません、順禮の致しまする御詠歌で御座いますよ。」

夏「順禮の歌とは夫は又一段面白い事であらふ早ふ時鳥唄ふて見よ。」

と仰せられる、侍女は水盤に在ましたる柄杓を持來たつて、

女「さア貴下は以前順禮を爲すつたさうで、此柄杓を御持あそばして三熊野の御詠歌を御唄ひなさい。」

飽込羞しめる、中にも一人の女中が、

女「さア早く御唄ひ遊ばせ。」

と柄杓を突付たる時元來男勝りの時鳥

時「不禮遊ばすな。」

と其女の襟髪を取るよと見えだが、ヤツと一聲、庭先へ投付た。

女「是は怪からぬ。」

と四五人左右から組附を引ばづし、バタリくと投付たる其手練に女中どもはコワ敵はじと逃出しました、跡には奥方お夏と方只一人と相成りました時、時鳥は塵打

はらつて静にお夏に向ひ、

時「賤き此身と侮蔑、琴彈よ歌よめと責らるゝは樵夫に海の路を問、海士に深山の

案内を聞に等き事で御座いませう、愚にも一徳ありとかや、女とは申せ、武家に仕ふる私、些は武道も學びました故、御覽あそばされる通り、多勢の女中を相手にいたしました、手に立ものは一人も御座いませぬ、定めし奥様にも武藝の御素養は

御座ひませう、未熟ながら時鳥御相手を致しまする。」

と云はれて奥方は只目ばかりバチくして呆れ果て居る、時鳥はニツコリ笑ひ、其儘悠々と上邸へ立歸つた、翌晩殿が御出になりました時に、此事を申し上る、全く奥方の所爲が悪いので御座いますから、時鳥には何の御咎めもない、奥方は耻辱を與へられたと大に怒り折あらば此返報を爲さんと待受る、然るに時鳥は病に胃されて打臥ましている、手當をいたす裡に金森式部少輔は翌年四月の上旬御國表へ御引取になる、病氣の爲に時鳥は一ヶ年江戸へ止る事となつて、汐見橋の御上邸で藥用いたし居りまする、寶曆四年五月の上旬、池に生たる燕子花は今を盛りと咲出で雲井はるかに啼わたる杜鵑の聲は殿様を思ふ時鳥には空しく斷腸の媒となりぬ、其を忘れんが爲か、時鳥は或夜燈火に對ひ一人書を披きて見ぬ世の人を友とし、餘念なく讀居りまする、夜は次第く更に更行、子の刻と覺しき頃ソツト拔足しつ、此部屋に近寄るのが御座います、別人ならぬ奥方お夏で御座います、先達て時鳥に耻

辱を與へんとして却て耻辱を與へられた其恨みを晴さんと、腰元共の寝入りしを待受け、密に我が部屋を出で是へ忍び参りました、障子を細目に開き中打見れば、時鳥が只一人、幸先よしと躍り入らんと爲したる折りしもヒラ／＼と飛來つたる小蝶ニツ三ツ、如何さま時鳥の部屋にありませう燈火を見て飛び來りしものと思はれます此時お夏障子をソツト一二寸開き、此の蝶を部屋に追入れました、小蝶はヒラ／＼飛び來り、燈火にハタと中り燈火は消えて眞の暗。

時「何人なるか障子開いて妾に殺生の罪を犯せしは、と廊下を見る途端躍り込んだるお夏は、兼て用意の一腰抜手も見せず、時鳥の左の肩に斬込んだり、偕は曲者にありつるか、此の身は人に恨を受くる覺えはない、と云ひつゝ傍にあつたる柳箱取て打付る、斬り込む太刀を潜り、ムツと計りに組付たり、暫く争ひ居りました内に、坐敷を出て廊下に顛倒折しも雲切て五月雨初旬の月の光に、時鳥は曲者の面を

見れば、如何に、お夏の方で御座います。

時「御身は奥様卑怯未練に欺し討とは何事なり。」

と云ひながら素より大力の時鳥、お夏を引倒さんと致しましたが、最初に深手を負ました故、力も抜けて思ふに任せず、次第く弱り来るを、して遣つたりと奥方お夏警を取へ庭にズルく引ずり下して、泉水に突亂れて居りまする、燕子花の此方八橋の處迄参りまして、取直した一刀左の腕をバツサリ斬た、モ一此時に時鳥は逆も命は無きものと覺悟を致しました故、少しも惡びれし氣色もなく、

時「早ふ命を取られよ。」

と背を摺りつけます、お夏は冷やかに笑ひ、

夏「時鳥此の手を以て枕に替しか。」

と又右の手をバラリ、

夏「此の顔にて殿様を欺せしか。」

と面を突く、實に其慘酷なる事は、申すも心持の悪い位、次第く息は切て参りました時鳥を見たとお夏は、

夏「時鳥今の思ひは何うじや。」

時「何時か御身も此の通りに致しくれん。」

とお夏の方を熟と見上げる面の凄さ、其儘息は絶えました、奥方お夏は血刀を拭ひ鞘に納め、人に見られては一大事と忍びやかに己れが部屋に歸りました、間もなく腰元が時鳥の死したるを見出し、御殿は顛覆るやうな騒ぎ、何者の爲に斯く酷たらしく最期を遂げたか、と人々は噂を致しますと奥家老の前田主馬が、

主「決して時鳥の方が非業な死を致した事を他言をしてはなりません、少しく拙者に考へも御座るから。」

と止めたは何うも奥方が可怪と見たので御座います、然し此の事を表沙汰にすれば御家にも係る大事、夫故他に洩ぬやうに女中共に口止を致したは流石に奥家老で御座います、そこで時鳥は飽迄も病死を致した体に致しまして、金森家の菩提所早稲田の宗三寺へ埋葬致しました、偕て奥方お夏は恨みを晴しましたので、大いに喜び三日計り経ての事で御座いましたが、女中どもを集めまして、或晩嗜好の琴を取出し雲井調子に致して、小督を一曲彈奏とすると、ピタリと琴の音が止つてしまふ、何うも不思議でなりませんから女中共が色々調べて見ましたが、駒や糸に少しも障りは御座いせん、お夏の方は再び調子を合せると、其時には差支なく音が出ますが、愈彈と云ふ段になると止つてしまふ、此時にカラ〜と笑ひ聲が聞えました、奥方お夏は、

夏『何者なるか不禮なり。』

と四邊を見廻しましたが人氣は更に御座いません、スルト時鳥の聲で、

時『琴を彈ふとしてひく事は出来まい妾が糸を押へて居るのが目に入らんか。』

と申しました、お夏の方は驚き、懐駒を取て立上るとビーンと云ふ琴の音色が聞えて、家の裏に當り、ホ、と云ふ笑ひ聲、居並ぶ女中は顔の色が變りました、夫れから毎夜の様に家の棟で女の笑ひ聲が聞える、剛情我慢な奥方お夏、別に心にも止めず五日六日と日を送りました、五月十四日の夜丑三ツの頃とも覺しき時、ド〜と云ふ風の音、夫につれて奥方お夏の部屋の天井にあたつて、

時『奥様今宵は修羅道へ御伴ひ申します。』

と云ふかと思ふと、ヒラリ天井から下り來つた時鳥が、突然お夏の方の髻に手を掛けて引立んとする。

夏『己れ。』

と奥方が懐劔を以て切拂ふ、バツと消える、暫時経つと次の唐紙をス——と開き、
時『奥様。』

と夫へ近寄る、お夏の方は又しても己れ妨げするかと懐劔を取り斬てかゝる、此の
物音に次の室より女中共が掛け付け見ると、誰も居らぬに奥方が懐劔をもつて荒れ
廻つて居ります。

女『アレ奥様御怪我をなさるとなりませぬ御傍には誰も居りませぬ、御静り遊ばせ』
と女中共が取押へんと致しましたが、狂ひに狂つた奥方お夏、懐劔を取直して己れ
の乳の下へグサと突き、

『時鳥今の思ひは何うじや。』

と云ひながら、ギリ／＼と引廻しました、血は流れて四邊は漢紅、坐敷は恰で朱
毛氈を敷たやうで御座います、其血汐の中にド——と倒れて三十三を一期と爲し、

敷れ畜生道に陥りました、時しもあれ庭の方よりピラ／＼と飛來つたる一團の鬼火
奥方の死骸の上をグル／＼と廻つたかと思ふと、バツと夫が碎けて數百の火となり
諸方に飛びゆき御殿を悉皆焼てしまひました、實に人の恨みは恐ろしいもので御座い
ます、奥方の死骸も判らないやうな始末、金森家の騒動は不辨な私が申上る事も出
来ません位ゐる、恰度此の夜の事で御座いましたが、美濃の八幡に居られる殿様、即
ち金森式部少輔が御近衆二三名を傍に侍らせ、御自慢の横笛を吹奏と致しますと、
ピタリと音が止つてしまふ。

殿『不思議な事があるものじやナ、ガに調子に狂ひもないが何うして音色がとまり
しか、替笛を持って。』

御近衆が今一ツ笛を持って参りました、夫を取上げて吹鳴さんとする、ピタリと音
色が出ない、此時殿様の左に消然控へ居る者がある、御覽なされると時鳥で御座いま

す。

『其方は時鳥ではないか、如何して是へ参つた。』

と問はれさめ、と涙を流しました彼の時鳥が、

時『永らく御情を頂きましたが、妾は修羅道に陥り娑婆世界に居られる殿様の御存

じ知れぬ苦みを致して居ります、とは云へ餘りの戀しさに今宵御傍に参りました』

と云ふかと思へば姿は掻消す如く、愈不思議に思ひました式部少輔殿、兼て時鳥は

病に胃され一と歳江戸屋敷へ養生の爲めさし置きしが、彼の身に凶事でもありたる

かしら、と心痛を致して居りますと、三日目に江戸から早打が参りました、奥方

が氣が狂ふて自殺致し、其上鬼火の爲に御殿が焼け、御愛妾時鳥の方は何人にか殺

され、酷たらしき最期を致したとの報知で御座います、イヤ驚いたのは殿様、夫で

は全く先夜見へたのが時鳥の靈である、是は正しく妻が嫉妬によつて時鳥を殺し、

其惡念の報ひで自分も横死致し、屋敷も焼たに相違ないと思召しました、翌年江戸表

へ参りし時、早稻田宗三寺に於て時鳥の追善を致し、林山和尚の教化によつて、時

鳥の祟は此の後更に御座いませんが、金森の家は寶曆十一年十一月、領分の百姓が

一揆を起しまして、八幡の城へ鐵砲を打かけ、非常な騒動が始まりました、夫が爲

に三萬五千石の金森の家は改易になりました、今日でも華族に金森と云ふ家は御座

いません、町方では是も時鳥の祟だと云ふ評判、翌年講釋師馬場文耕と云へる者が

金森家の騒動を講談に致し、日本橋樽正町又兵衛と云ふ寄席で、御客様に時鳥殺し

から金森の斷絶た事を御話を致しましたので、南町奉行土屋越前守の手に召捕れ

寶曆十二年十二月廿四日、千住に於て打首獄門の刑に處せられました、時鳥の一念

は獨り金森家の方に祟りしにあらず、講釋師にまで祟りましたと云ふ、夫れから以

來吾々社界で申上げませんが、今回は御好みによつて、斯くは言上致します、何う

か時鳥の靈によつて、發行淺草國華堂も如燕も金貨銀貨の祟りを受けたいと只今より願ひ居ります次第に御座います。
 先づ第一編は是にて讀終りと致して引續き第二編を發行致しませば何卒御愛讀の程を今より願ひあげます者は。

講演者 桃川如燕
 發行所 國華堂書店

實怪談百物語終

明治四十三年四月十八日印刷
 明治四十三年四月廿二日發行

定價金三拾錢
 送本料金六錢

(桃川如燕講演)

不許複製

(實談怪百物語)

講演者 桃川如燕

編輯者兼 山崎曉三郎

印刷者 井出五三九

東京市日本橋區若松町廿一番地

發行所

東京市淺草區新福井町

國華堂書店

●圖書目錄御入用ノ節は往復はがきにて御申越次第御送附いたすべく候

(浪界諸大得意の讀物)

浪花節人名揃西關東關 挿寫眞入版

(全一冊二百頁定價十二錢送料四錢)

誰れが讀んでも面白く讀む度毎に品性を養ふ

〔内 容〕

●赤穂義士 大石内藏之助桃中軒 雲右衛門

●度安戸村丹三郎浪花亭 吉亭

●赤穂義士 赤垣源藏早川 燕川

●寛永力士 雷電爲右衛門甲吉齋 虎

●彦山利生 毛谷村六助甲好齋 齋

●上州土産 塩原多助吉川福亭 小

●大久保彦左衛門三河車屋 圓

●藝題付紀の國屋 東三

●一蟻川問答大京 教山

●吉原八景 玉菊燈籠浪花亭 若

●日露戰記吉田 虎

●上州後名 安中草三甲齋 丸

●藝題付名物隅田川三河車屋 圓

發行所 東中淺草區 新福井町一 國華堂書店

本文節附

264

43





東京
國華書局
發行



實説
怪談
百物語

浪上義三郎撰

桃川如燕講演

264
43

097170-000-0

特12-596

実説怪談百物語

桃川 如燕 / 講演

M43

DBS-0981

